月刊

こころのとも

第十二巻
十二月号

積もる業

虐待を受けて
非行少年になり
虐待を受けて
子に虐待をする

愛情を受けずに育って
人に不信感をもち
愛情を受けずに育って
子に愛情をかけない

業が積もっていく
いまの世よ

どろ水を気付けない

どろ水に
どっぷりつかり
どろ水と
気付けないのだ
現代人は

人生を考え直して

みたい人は（九五）

―『正法眼蔵』解説（三九）―

仏性の巻を続けます。

第十二祖馬鳴（めみょう）尊者、十三祖のため仏性海をとくにいはく、山河大地、皆依建立、三六通、由茲発現〔山河大地は皆な依って建立し、昧（さんまい、もしくは、ざんまい）六通は茲（れ）に由って発現す〕。

しかあればこの山河大地、みな仏性海なり。皆建立といふは、建立せる正当恁麼時、これ山河大地なり。すでに皆依建立といふ、しるべし、仏性海のかたちはかくのごとし。さらに内外中間（ないげちゅうげん）にかかはるべきにあらず。恁麼ならば、山河をみるは仏性をみるなり、仏性をみるは驢腮馬觜（ろさいばし）をみるなり。皆依は全依なり、依全なりと、会取し不会取するなり。三昧六通、由茲発現。しるべし、諸三昧の発現来現、おなじく皆依仏性なり。全六通の由茲不由茲、ともに皆依仏性なり。神通はただ阿笈摩教（あぎゅうまきょう）にいふ六神通にあらず。六といふは、前三三（ぜんさんさん）後三三（ごさんさん）を六神通波羅蜜といふ。しかあれば、六神通は明明百草頭、明明仏祖意なりと参究することなかれ。六神通に滞累せしむといへども、仏性海の朝宗（ちょうそう）に罫礙（けいげ）するものなり。

参考までに、現代語訳として玉城康四郎著『現代語訳正法眼蔵２』（大蔵出版社刊）を引用させて頂きます。

第十二祖の馬鳴尊者は、十三祖のために、仏性海を次のように説いている。

「山河大地は、皆な依って建立し、三昧六通は、茲（これ）に由って発現す〕。

こうしてみると、この「山河大地」はみな仏性海である。「皆依建立」というのは、建立しているとき今日このとき、これが山河大地である。すでに「皆依建立」といっている。仏性海のありさまはこのようなものである、と知るべきである。さらに、内外や中間などには関係しない。こういう次第ならば、山河を見ることは、仏性を見ることである。仏性を見るのは、驢（ろ）の腮（あご）や馬の觜（く

ち）を見ることである。「皆依」とは全依（ぜんえ＝まったく依りかかること）であり、依全（えぜん＝依りかかっている全体）である、と会得するのである。あるいは、会得する必要さえないので会得しないのである。

「三昧六通は、茲（これ）に由って発現す」。もろもろの三昧（さんまい）が現れ起こることも、同じく「皆依仏性」である。六神通の全体が、茲に由るのも、茲に由らないのも、ともに「皆依仏性」である。六神通は、ただ小乗教に説かれている六神ではない。六というのは、あれこれさまざまあるのを六神通波羅蜜というのである。したがって六神通は、「明々たる百草頭（明々白々たる万事万般）」であって、それを反省して、「明々たる仏祖意」であると参究してはならない。万事・万般は六神通にからめられても、ついには、諸川が海に入るように、仏性海に流れこむのである。

それほど難しくないのではないでしょうか。現代語訳を読まれれば、大体意味が通じるように思えます。私には間違いと思えるところや、補足がいるところだけ、少し解説しておきます。

まず「会取し不会取するなり」という部分ですが、形式論理的に考えますと、これは矛盾です。現代語訳のように「・・会得するのである。あるいは、会得する必要さえないので会得しないのである」と訳しても、矛盾はまったく解消されていませんし、説明もされていません。

これは、「有時の巻」で出てきました「会象不会象なり、会草不会草なり」と同じ表現法なのです。昨年（第十一巻）の四月号で解説していますので、お持ちの方は、ぜひ、もう一度ご確認下さい。

この表現（あるいは、この境地）を、正しく解説できている解説書は、私の見た限りでは一つもありません。

昨年の繰り返しですが、老子の「無為而無不為」と同様のことを肯定のかたちで言えば、「会取而不会取」ということになるのです。私の理論でいいますと、「皆依は全依なり、依全なりと、会取し不会取するなり」とは、無意識で自己（精髄）と他己（神髄）が完全に総合された境地に至ったとき、はじめて言えることなのです。そして、そうなったとき、あらゆる存在はすべて仏性をもった存在（皆依仏性）と、心の底から思えるのです。

それは、この世の存在である、物質にも、生命にも、精神にも、深い感動をおぼえるとともに、この世の相対な存在者は、互いに依存しあっている、いわゆる相互相依の世界だと実感できるのです。

ここに出てきました、道元のことばで言いますと、あらゆる存在が「皆依建立」なのです。

そして、こうした境地に至ったとき（由茲発現）、三昧六通という境地を味わうことができるのです。

ところで、この三昧（さんまい）も六通も現代語訳に解説や意訳もありませんので、以下、少し説明を加えておきます。

まず、三昧（さんまい、または、ざんまい）ですが、これはサンスクリット語のｓａｍａｄｈｉの音写で、真言密教では三摩地（さんまじ）といっています。それは、さとりの境地を指すことばです。

しかし、仏教では一般に、精神統一する心の働きや、そうなった状態を言っています。こうした精神統一した状態の最も深い段階として「非想非非想」があると説かれていますが、これは、まさに老子の「無為而無不為」と同じ論理構造をしていることに注意しなければなりません。

次に、六通（ろくつう）ですが、これは、後に出ています六神通波羅蜜の「六神通」と同じです。それは、仏や菩薩が具える六種の超人的な能力で、①神足通、②天眼通、③天耳通、④他心通、⑤宿命通、⑥漏尽通をいいます。

①神足通（じんそくつう）は、どこにでも行ける自在の通力をいいます。

②天眼通（てんげんつう）は、超自然的な眼で、死後の世界を見通すこと、すなわち天界と地獄とを見ることができることです。

③天耳通（てんにつう）は、自在に一切の言語・音声を聞くことのできる通力をいいます。

④他心通（たしんつう）は、他人の心のありさまを知ること、つまり、相手の気持ちを察して、どのような考えや心情をもっているのかを見抜く力をいいます。

⑤宿命通（しゅくみょうつう）は、前世のありさまを知る智恵をいいます。

⑥漏尽通（ろじんづう）は、生存の尽きてなくなることを確認すること、または、煩悩のけがれのなくなったことを知る智恵をいいます。

なお、前に出ました「六神通波羅蜜」は、こうした、さまざまな神通力を完成することをいっています。

最後に、ここで大切なことは、あらゆる存在、物も、生き物（山河大地）も、人間も、すべて仏性の現れなのですが、人間だけが、仏性を知ることが出来るのです（三昧六通、由茲発現）。でも、それは、仏さまの教えに則って、ただひたすら修行するときだけなのです。

自作詩短歌等選

米国の慢心を戒める

ロシアの
プーチン大統領は
アメリカと協調して
新しい世界の構築を
模索しているという

でも
ロシア人の中には
「米国はますます
自己過信に陥っており
他人の意見を聞かずに
傲慢な態度をとっている」
と批判する声が
絶えないという

アメリカという強者よ！
経済大国主義から脱せよ
国益ばかりを主張するな
世界の警察意識を棄てろ
弱者とて見殺しにするな
地域固有文化を尊重せよ
農産品の輸出を禁止せよ
民主主義の欠陥に気付け
キリスト教を再生させよ
　　日本の一弱者より

凡愚の自覚

平和を実現するには
あらゆる人が
自らを凡愚と認め
謙虚にならなければ
ならない

そしてお互いに
譲り合わなければ
ならない

しかし
これこそが
自己肥大した
現代人にとって
最も
困難なことなのだが

豚か人間か

ＥＳ細胞（受精卵）を
操作すれば
人間の脳をもった豚を
作り出すことも
可能だという

それは
豚なのか
人間なのか

生命を
弄んではならないぞ

いじめで自殺した
中学３年生の親に
町と県は
壱千万円を支払えとの
判決が下った

学校で起こっていて
未婚率の上昇
未婚率
高まるばかりで
日本の
活力弱まり
衰退必定

日本人
あらゆる人が
血相を
変えておのれの

親の知らないことを
先生も
知らなかったでは
すまされない
ということ

エゴを追求

差別との闘い
ハンセン病訴訟が
全面解決したという

差別との長い闘いに
こころから
敬意を表したい

学校で問題を起こした
生徒の家を
家庭訪問すると
親は
家ではいい子です
学校で問題を
起こすのは
学校が悪いから

犯罪加害者の居直り
犯罪加害者も
被害弁償では
被害者と
平等・対等な立場で
居直った交渉ができる

これも

ではないですか
という親もいる

不信の社会・学校
親は教師を信頼しない
教師も親を信頼しない
教師同士も
互いに信頼しない

民主主義のお陰なの
現行裁判制度のお陰なの

罪の懺悔はどこへ
反省はどこへ
吹っ飛んだのやら

エゴイストの国・日本

アメリカで
テロが起こったときの
日本政府の反応の遅さ
そして
官房長官の最初の発言の
なんとすごいことよ
「邦人の安否確認を
最優先にする」と

日本人は
どうしてこんなに
エゴイスティックに
なってしまったの

その後の対応は
すべて外国のまねばかり
政府の人たちは
みんなオームに
なってしまった

死への傾倒文化

アメリカの
自由競争肯定主義は
生の享楽を
希求する文化
（自己追求文化）

オサマ・ビンラディン氏
が率いる
アルカイダの主張は
生の享楽を
否定された者の
死への傾倒の文化
（他己追求文化）

構造改革の犠牲者

「痛み」うけ
自殺に走る
ひと多し
他己を失う
日本の病理

全ての存在者を弄ぶな

アメリカの環境学者
レオポルドは
（１８８７～１９４８）
『野生のうたが聞こえる』
という本で
倫理的配慮の対象を
動植物だけでなく
それらがすむ空間にまで
広げることを
主張している

それは
私の言葉でいえば
物質の尊厳
生命の尊厳 ┣自然の尊厳
精神の尊厳を
主張するということ

遺伝子や核などの
「物質を弄ぶな」
贅沢や遊びなどで
動植物などの
「生命を弄ぶな」
弱者を
抑圧したり
搾取したり
放置したりして
「人間を弄ぶな」

自作随筆選

先生は友達感覚がよい！？

十一月二十七日付けの読売新聞の文化欄に、甲南女子大学助教授の島田博司氏が「新しい大学授業の進め方」「先生は友達感覚で学生も楽しさ知る」「若者気質探り提案」と題して、記者との談話を載せていました。

それによりますと、同氏はこれまでの研究を集大成して「ＳＬＧＥ」モデルというものを提案しています。この、聞き慣れないＳＬＧＥのＳは「Ｓｔｅａｌ」で、範を示す師とそれを盗もうと精励する弟子の間で成立する授業スタイルを示し、次のＬは「Ｌｅａｒｎ」で、コーチ役の教師が知識や技能を教授し、生徒は真面目に習う（＝Ｌｅａｒｎ）ことで、これらの方法は従来の授業のやり方だとしています。そして、ＧとＥは「Ｇｅｔ＆Ｅｎｊｏｙ」で、友達感覚の先生が学びの足場を提供し、生徒は楽しみながら知識と情報を効率よくゲットする、という現代の学生にあった新しい授業のやり方なのだ、としているのです。

読んで、驚きました。私が、これまで、だめだと言ってきた授業が堂々と主張されていたからです。

私は、教育に関しましては、これまでに「障害児響育要諦」「人間響育要諦」「学道要諦」の三要諦を発表しています。ここでは、それらを繰り返したくはありませんが、以下で書く趣旨は、おそらくそこに書かれていることと、同じになると思います。ご希望があれば、右の三要諦のコピーを差し上げます。お申しつけ下さい。

確かに、大学進学率の上昇につれて大学生の学力は、一般的に低下しています。そして、それにつれて学習意欲の乏しい学生が多く入学していることも事実だと思います。ですから、従来の授業方法では、授業らしい授業にならないことも多いのだと思うのです。たとえば、学生が「生き生きと私語はする」は、飲物は飲むは、煙草は吸うは、ガムはかむは、携帯電話でメールのやり取りはするは、で、じっとして聞いている学生は少数のような授業もあるようです。

私の体験でも、大学院の授業で私語をする学生があり、きつく注意したところ、次回からその学生は来なくなってしまった、ということがありました。

こうした学生に授業らしい授業をしようとすれば、この方が言われるように、学生を楽しませる「エンターテイナー」のような先生にならなければならないのかも知

れません。でも、私は、そんな大学なら、早くつぶしたほうがましだと思います。そんなことをしているから、いま、大学の存在理由すらが問われるようになっているのだと思うのです。

実務家を育てる、専門学校的色彩をもつ工学部や法学部や経済学部・商学部などでは、知識や技術・技能を身に付けることが主たる目的になると思いますので、どんな方法であれ、学生がついてきて、そうしたものが修得できれば、それでよいという面もあると思います（エンターテイナーのようなやり方では、すぐ限界が来ますが）。でも、教育学部や医学部、文学部や宗教学部のような、特に、人間の生き方や人々の福祉・安寧・幸福を問題にするような学部では、授業そのものが、すでに人間のあり方そのものを問うという面がありますから、方法がどうでもよいというわけにはいきません。

まさに、授業をする人、その人の人柄や生き方、硬く言いますと、人格の完成度が問われているわけです。

いま、教育基本法の改正がささやかれていますが、その第一条は、教育の目的は人格の完成にあり、としています。教育の基本の基本は、まさに、人間は、完成した人格に触れることなくして、人格の完成を期待することはできない、という点にあるのです。

民主主義の世界では、偉人や聖人は不必要とされています。市民一人ひとりが、賢くなって、誰かの考えに頼るのではなく、どこまでも一人で判断することが求められています。聖人の言われたことに、謙虚に耳を傾けるよりも、自らの内的な判断が優先されるのです。現代の若者たちは、いや、もっと言いますと、戦後の教育を受けた人々は、皆こんな考え方で育てられてきたわけです。そして、その判断の善悪や正邪は、それを多くの人が支持するかどうかで決められるのです。

現在、学校が荒れています。それは、この方が指摘しますように、大学に限ったことではありません。下は幼稚園から、上は大学院まで、そうなっています。

その原因は、戦後、宗教を喪失し、民主主義のみが価値判断の基準になってしまったことにあります。

学生や生徒・児童・幼児が、人（教師）の話を聞かないのは、人の話よりも自分の判断を優先させる、民主主義的風潮によっているのです。小手先でエンターテイナー的対応をしてみても、基本的な解決にはなりません。逆に、ますます、生徒らを増長させるだけです。間違った方向にますます進むだけです。

人間の響育には、自由と統制と愛情がいります。それを体得した人との「こころ」の触れ合いが必要なのです。

釈尊のことば（一〇六）

―法句経解説―

（三四五、三四六）鉄や木材や麻紐でつくられた枷（かせ）を、思慮ある人々は堅固な縛（いましめ）とは呼ばない。宝石や耳輪・腕輪をやたらに欲しがること、妻や子にひかれること、　それが堅固な縛（いましめ）である、と思慮ある人々は呼ぶ。それは低く垂れ、緩く見えるけれども、脱れ難い。

かれらはこれをさえも断ち切って、顧みること無く、欲楽をすてて、遍歴修行する。

少し分かり難いのではないかと思います。

それは、まずはじめに、縛という字に「いましめ」とカナが打ってあり、また、それに付く形容詞が、「堅固な」となっていることに原因があるように思えます。普通に、「けんごないましめ」ということばから受ける語感は、「厳格な戒律」といった響きがあるように思えます。でも、ここでは全く逆の意味をもっています。

因みに『大漢語林』（大修館書店刊）の「縛」という字を引いてみますと、次のようになっています。

①しばる。○くくる。たばねる。つかねる。「束縛」○つなぐ。しばって動けないようにする。捕らえつなぐ。「捕縛」②いましめ、なわめ（縄目）。罪を犯して縄でしばられること。

こう見てきますと、厳格な戒律どころか、逆に、人を執らわれの奴隷にして、動けなくするもののように思えます。

それは、何かと言いますと、「宝石や耳輪・腕輪をやたらに欲しがること、妻や子にひかれること」ということです。前半の「宝石や耳輪・腕輪を欲しがること」が、人を不自由にすることは、これまでに何度も何度も出てきましたが、後半の「妻や子にひかれること」はそう多くはありません。一番近いところでは、平成十一年（第十巻）の八月号で取り上げました（二八七）があります。それは、次のようになっています。

「子どもや家畜のことに気を奪われて心がそれに執着している人を、死はさらって行く。―――眠っている村を洪水が押し流すように」。

お持ちの方は、もう一度、そこの解説をお読み頂ければ幸いです。

ここで出てきました「妻や子にひかれること」が、人を不自由にする「枷（かせ）」になることは、多くの人にとって理解できないことのように思えます。

（二八七）の解説でも書きましたが、いま、多くの親が、子どもに対する愛情を失って来ているように思えます。それは、いま、親による子どもの虐待件数が、どんどん増えていることを見ても分かります。それは、人々が、何にも執着していないことの反映のように思われるかもしれません（ですから、この偈は誤解を受ける可能性があるように思えます）。でも、実際は、そうではなく逆で、多くの人が、執着の度を強めているのです。それは、自分への執着です。釈尊の時代とは異なり、現在では、子に対して虐待を加えるほど、自分への執着を強めているのです。この偈の趣旨は、自分への執着を棄てることを説くために、自分にとって一番大切な妻や子を例に上げているのですが、もうそれすらも教えにならないほど、自分への執着を強めてしまっているのです。

虐待までいかなくても、一見、愛情をかけているようでも、それは、自分の欲望に子どもをそわそうとする場合がとても多いのです。そして、そうすることによって子どもに「深い業」を背負わせているのです。でも、悲しいかな、それに気付けません。

教育は、元来、人格の完成、つまり子どもを「善い人間」にすることが目標なのですが、いまでは、多くの親は、よい人間に育てようとするのではなく、勉強がよくできたり、スポーツや音楽が上手になったりすることを目標にしています。そうするために、子どもの人格の完成には、かえってマイナスになるようなことでも平気でしているのです。もし、それが悪いと指摘してあげても、では、善い人間とはどんな人間なのか、と必ず質問が返ってくることだと思います。それは、善い人間とは何かを聞いて知りたいというより、居直ってそれ以外にあり得ないではないか、と逆に反撃する気分で聞いて来るのです。

親の取る姿勢のたとえですが、まず第一に、子どもの「尻を叩く」親がいます。嫌がっているのに、何時間も机に座らせて強制的に勉強をさせます。そんなことをされても、本人は殆ど効果がないことを自覚していても、親の権威（力）で無理やりに押さえつけてやらせるのです。子どもはまさに悲鳴をあげていることに、親は気付きません。そうしてやることが、親の務めぐらいに思っています。人格形成のうえでは、逆にマイナスにしかなっていないことに気付けないのです。そうした親をもった子は、人を信じません。人の言うことを素直に聞くことができなくなっています。性格がねじまがってきています。でも、親は、たとえ人からそれを指摘されても、やめられません。なかば脅迫的ですらあるのです。

また、逆の親もいます。「幸いにして」よく勉強ができたりしますと、全ての躾けを放棄してしまいます。よくできればできるほど、家事の手伝いはさせない、子どものいうことなら何でもかなえてやる。例えば、欲しいものがあれば、よくできることを条件に、買ってやる。毎日のように、ことばで、できることを褒めてやる。こうして、どこまでも、子どもを甘やかします。そうしていますと、子どもは、ある程度、「よい子の役割」を演じ続けます。大きな挫折が来ない限り、よい子でいつづけることができます。しかし、そうしていますと、実は、とても弱く、わがままな性格、つまり他者に対して鈍感で、他者のことが考えられない性格になっていくのです。それは、たとえどんなに勉強できようとも、人格の完成（善い人間に育つこと）には、ほど遠いものと言えるのです。

こうした親のエゴに基づく子育てなら、何もしないで、放置しておくほうがましなくらいです。それは、この偈の前半で、説いています、自分への執着を棄てるべきことの全く逆になっているのです。つまり、こうした子育ては、自分への執着を極端に強めている結果なのです。

現在では、多くの人間関係、いや、すべてと言っていいほどの人間関係が、自己追求の手段と化しています。親子も兄弟も、夫婦も、親戚も、近所付き合いも、いわんや職域団体内での関係も、あらゆる人間関係が、経済学用語で言えば「利益と選好」、一般的なことばでいえば「好き嫌い（＝選り好み）と損得」に還元されているのです。

ですから、釈尊の時代よりも、ずっとこの偈は切実さを増しています。でも、それと逆比例して、この偈が人々に訴える力は弱まっているように思えるのです。

最後に、後半の「かれらはこれをさえも断ち切って、顧みること無く、欲楽をすてて、遍歴修行する」という部分を解説しておきます。

ここで、「かれら」とは誰かですが、最後にあります「遍歴修行する」という部分から、僧侶もしくは修行者のことだと思えます。

僧侶は、勿論、「宝石や耳輪・腕輪をやたらに欲しがること、妻や子にひかれること」を戒め、そうしたことへの執らわれを捨てなければならないことは、言うまでもないことです（でも、現在では、出来ていません）。まして、一般の人たちは、こうしたことを追求することが、生き甲斐だと思っています。悪いことなどとは、精神のどこを探しても見当たらないように思えるのです。個に閉じた、エゴ追求社会（自己社会）の病弊です。

後記

一、師走となり、寒い日がやってきました。お風邪など召されませんように。

二、読者の方で、パソコンのインターネットをしておられる方にご案内があります。それは、私の研究室の「ホームページ」ができたことです。作ってくれたのは、かつてのゼミ生だった小川敦君と研究生の清重友輝君の二人です。アクセスの仕方ですが、ヤフーで「ひびきのさと」と検索して頂きますと、出てきます。または、鳴門教育大学でやっても私の研究室が出ますから、そこからアクセスできます。あるいは、中塚善次郎でも出すことができます。

三、内容は、研究室でやっていることの概要、私の略歴や業績、『こころのとも』の目次と、最新号ではその内容、などです。一度お試し下さい。

四、十一月二十四日（土）に、広島の安田女子大学で中四国心理学会が開かれました。私と、前出の小川敦君と清重友輝君、それにかつてのゼミ生だった大向裕美さんの四人が発表しました。

五、発表内容のことですが、私と清重君がＡＳＬ（私たちが構成した学習適応性検査）について、小川君と大向さんは「心の理論」について発表しました。後者は、いま、はやりとあって、議論がわきました。私が座長だったこともあり、参加者があるか心配だったのですが、結構、多かった（五十名程度）こともあり、有意義な発表だったように思います。

六、安田女子大学が、ホテルを思わせるほど立派だったことと、そこで、発表者など参加者のお世話をして下さった学生さんの「感じのよさ」が印象に残りました。

七、なお、「心の理論」については、私の理論からの評価を論文にしています。ご希望でしたら、ご一報下さい。

八、今年も、一年間ご愛読いただきありがとうございました。よき年をお迎え下さい。

月刊　こころのとも　第十二巻　十二月号（通巻一四四号）

平成十三年十二月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０―８―３８６６０